九州産業コンサルタント協会産業支援フォーラム

2020年1月18日
博多第1ホテル

「災害時に注目されるべき健康生成要因」

波平恵美子
お茶の水女子大学名誉教授
文化人類学・医療人類学

1.「健康生成要因」という考え方

健康被害を生じると、その要因を探るのが一般的な対応である。しかし、その逆の考え方、「なぜ健康を保持できるのか」を考えることが大規模災害時の被災者への救援政策においては重要である。特に、大規模自然災害によって多くの人が被災し、それまでの生活環境が一変し、多くの人と共同生活をする環境では、健康は維持するとともに常に生成されるものであるという視点が重要である。

健康を生成する要因は個人個人で異なると同時に、それぞれの社会に共通する要因がある。それは「健康保持と生成の文化」とでも呼ぶことができる。集団に共通する健康生成要因は長年の経験を積み重ね、その集団が伝承したものからなる。

その要因全体は、時代により、地域により少しずつ異なるので、健康生成要因を知るには、大規模災害の起きる以前の生活の状況を知ることから始まる。

2. SOC（首尾一貫感覚）と「生活世界」の復活及び日常性の持続

健康生成要因の一つが、自分自身の「生活世界」の把握である。それは、これまで生きてきた記憶やそこでの体験を通して獲得した様々な生き方戦略や積み上げてきた社会関係・人間関係によって構成される。大規模自然災害は、環境のすべてを一変させ、生活世界が崩壊したかのような感覚を人に与えることになる。

・環境が一変した後でも維持できる生活世界としては**生活時間の維持**がある。できるだけ以前の生活のリズムに近い形で施設の運営を図ることで達成できる。

・**人間関係の維持**は、健康生成に重要である。特に災害以前の生活において共同作業が多く、集会が定期的に行われていた農山漁村の生活では、人間関係は、身体距離が近く、対面での接触が多い。距離的に離れたばらばらな地域での避難生活は人間関係の維持を困難にする。少しでも安定したら、定期的接触が企画されることが重要になってくる。その際、郷土料理を作り共食するなど、以前の日常生活の疑似体験が大きな役割を果たす。東日本大地震と津波被害の被災地で、多くの困難を抱えながら、祭礼行事の復活が目指されているのは、日常世界を取り戻すための一つの試みと考えられる。

・**生活世界における主体性把握の確信**は、新たに引き受けざるを得ない生活世界を把握し、災害以前からの自己のSOCを復活させるために必要である。施設の運営、運営組織の構築、

外部との関係の構築などにおいて、被災者が主体的に決定・行動できる状況を整えることが重要である。それにより、新しい生活世界が当事者にとって最も適切に創設できると考える。

3. 多様性の尊重とブリコラージュ的生活への模索

災害規模が大きくなればなるほど、被災者への支援には大量・共通・平等が優先されなければならないという考えが強調されがちである。支援物資も、十分ではないにもかかわらず、同じようなものを届けることが優先されがちである。しかし、物資の不足や運輸の困難や支援者の不足が大きく、実現は困難で、それが被災者をより困難な状況に陥れる。それに対応するには、多様性の容認と「そこにあるもの、手に入るものは何でも活用する」つまり「ブリコラージュ・器用手仕事」と言われる概念の活用が重要になってくる。

ブリコラージュとは、前産業化社会に共通するところの、モノの制作において、そこにあって手に入りやすい材料を使い、そこで使える技術で「間に合わせの」ものを作り上げることの重要性を意味する。支援を待つよりも、まず、生命の確保、いまある健康レベルの維持のために、それまでの経験による「豊かで、いつでも与えられている」状況からの転換を図ることが重要になってくる。

～～

＊コメントやご質問をお寄せください。それに対し、できるだけお答えいたします。

※ 参考文献

災害時に注目されるべき健康生成要因
－災害後の健康被害を予防するための私論－

保険医療科学　2019　Vol.68 No.4

https://www.niph.go.jp/journal/data-68-4-j68-4/

波平恵美子のプロフィール

学歴および職歴

１９４２年　福岡県に生まれる
１９６５年　九州大学教育学部卒業
１９６７年　九州大学大学院教育学研究科修士課程修了
１９６７年　同上研究科博士課程入学
１９６８年−１９７１年
米国テキサス大学（The University of Texas at Austin）大学院人類学研究科に留学
１９７７年修了、Ph. D.　取得
１９７３年　九州大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学
１９７３年−１９７４年　九州大学教育学部付属比較教育文化研究施設助手
１９７６年−１９８０年　佐賀大学教養部助教授
１９８０年−１９９８年　九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）助教授、教授
１９９８年−２００６年　お茶の水女子大学文教育学部教授
２０００年−２００４年　お茶の水女子大学ジェンダー研究センター長併任
２００６年３月　お茶の水女子大学退職、お茶の水女子大学名誉教授となる

学会活動

２０００年−２００２年　日本民族学会（現日本文化人類学会）会長
同上学会理事、評議員、
日本民俗学会評議員